

桑名文化協

平成27年3月15日
第 37 号

桑名市文化協会
桑名市中央町2丁目37
TEL 24-1361
http://bunkyo-kuwana.jp

桑名市民芸術文化祭

吟剣詩舞道の 祭典を終えて

芸能Ⅱ部門 藤田 周岳
(桑名市吟剣詩舞道連盟)

昨年十一月二日、市民会館小ホールで「吟剣詩舞道の祭典」を開催しました。桑名市民芸術文化祭は第二十三回となります。吟剣詩舞道連盟に加盟する二百二十余名程の会員が日頃の練習の成果を發表しました。

最初はいつも通り少年、少女の吟詠で始まり、大きな口を開けて、力いっぱい吟詠に会場から大きな拍手がありました。このような若い人たちがたくさん増えれば大変喜ばしいこ



とです。プログラムも進み、漢詩や和歌などの吟、詩吟に合わせた勇ましく舞う剣舞、扇などを使つて艶やかに舞う詩舞、扇舞がありました。皆さん力こもったすばらしい舞でした。

午後の部では今年度の特別企画として、岳風流桑名吟道会が「桑名歳華の譜」と題して構成吟を發表されました。桑名の地は、昔の旅人にとって宿場の内でも特に風趣に富んだ印象深い地でありました。当時を旅する幾多の文人たちは紀行文や日誌の中で和歌、俳句、漢詩などに詠んでおります。吟道関心流では、詩仙「李白」と題して構成吟をされました。李白は中国盛唐の詩人で同時代の杜甫と



もに、後世「詩仙」と称されて、多くの名詩を残しました。それを詩吟、書道吟、舞で發表されました。岳風彰岳会は合吟、独吟で發表しました。

祭典終了後は、懇親会を開き会員の親交を深め、連盟のさらなる発展を祈念いたしました。

これからも地域の文化の発展に貢献できればと思っております。

芸能の祭典を終えて

芸能Ⅰ部門 渡邊 雅子
(箏曲 春琴会)

昨年十一月二十二・二十三日の二日間、桑名市民会館大ホールにおいて第二十三回桑名市民芸術文化祭「芸能の祭典」を開催致しました。

私達芸能Ⅰ部門は、個人会員一名、団体会員三十八団体の四百八十二名で構成された桑名市文化協会最大の構成団体となっています。

今回出演しました団体は、舞踊八団体、大正琴四団体、箏曲十団体、民謡三団体、長唄・雅楽・鼓・相撲甚句・一絃琴等で三十団体の四百名余の出演となり、大変華やかな舞台となりました。

二十二日の舞台は五団体のみの出演となり、大ホールの観客も少なく寂しい舞台となりましたが、翌二十三日は舞台に所作台を敷き

舞踊からのスタートとし、早朝から多くの入場者があり、日本舞踊の人気の高さを感じました。午後からは、大正琴から始まり、十七団体の発表があり、多くの市民の皆様楽しんで頂けたものと思っています。

毎年開催して感じることですが、日頃の稽古の発表の場として出演するのはとても大事ですが、さらに多くの皆様に関心もしくは興味を持っていただけるような舞台を考えなければいけないかなと思っております。芸能Ⅰ部門の皆様



の協力を得て部門内同士のさらなる交流を図り、新たな舞台が構成できればと思います。

最後に、私達芸能Ⅰ部門は、多くの高齢者の皆様が参加されています。これからも芸能を通じて、元気で健康な生活を送り、笑顔のある舞台をみんなで見たいと思います。



美術部門展を

終えて

美術部門 吉田久美子
(彫創会)

市民芸術文化祭は今回で第二十三回を迎えました。振り返って、美術部門展も多くの方のおかげで長い年月続いてきたことを思うと感慨深いです。

美術作品を出展する私たちには作品を作りあげる喜びと見ていただける喜びがあります。見ていただいた方から「あの作品がとても良かった」「今回は作品が華やかでとても見応えがあった」という声を聞きました。今回は特に美術部門の団体会員の充実を目指し、会員を増やすことが出来たので展示作品が多くなり華やかになりました。



只、現在活動をされている団体において携わる方の高齢化が進むと今後の先行きが不安です。桑名市民展では学生の活躍が見られるのに、美術



部門展を見に来てもらったり、文化活動に参加してもらえらる若い人がなかなかいないのが現状です。学生以外にも子育て世代、子育て世代への働きかけや交流など、若返りができるきっかけを、これから考えていくべきではないかと思っています。

興味を持ってもらえらるような美術作品を展示することを考えたり、アンケートを実施していろいろな人の声を聞いたり、各部や各団体で同じテーマに沿って作品を作ってみるといったアイデアなどを試行錯誤することも一つではないでしょうか。

多くの方の力で続いてきた美術部門展なので、素晴らしい作品を発表してくれる若い人が増え、桑名において末永く文化活動が続いていくことを強く願っております。



演劇の新たな可能性

演劇部門 相原 千景
(演劇集団Cブレンド)

今年度の市民芸術文化祭の参加作品として、私たちが作った企画は、『ゲキゲキ!』と題した演劇総合イベントです。

Cブレンドは、今年から、『おはなしのハコ』という、0歳の赤ちゃんから楽しめる紙芝居中心の読み聞かせイベントを始めました。現在、産婦人科ゆずり葉と、寺町通商店街でそれぞれ月1回のペースで開催し、ご好評をいただいています。お客様からもつと子供たちに芝居らしい演技も見せたいというリクエストをいただき、今回のイベント型公演を思い付きました。

私自身が身をもつて感じていることです。小さな子供を連れては、映画やお芝居を観に行くこともできません。観に行けたとしても、母子室からの鑑賞。それでも音響が聞こえなかったり、「帰ろうよ」とぐずられ、最後まで見る事ができなかったり。

今回のイベント会場には、小さいお子さん連れの方のために、工夫を施しました。一部をパーテーションで仕切り、授乳・おむつ替えスペースを設置しました。普通の椅子席に加え、幼稚園などで使う子供椅子の席、そして、最前列はごろ寝マットを敷いて、自

由な格好で鑑賞できる席に。演目は、発声練習のデモンストレーションから始まり、紙芝居、観客の皆さん参加型の即興劇、休憩をはさんで童話をモチーフにしたコメディを上演しました。0歳の、ねんねハイハイの赤ちゃんから、若いカップル、80代という年齢のお客さままで、会場一体となつてCブレンドの演劇ワールドを楽しんでいただきました。今までにない劇空間での、盛りだくさんのプログラム。はじめて間近で演じられる芝居に夢中な子供たちと、それを微笑ましく見守りながら一緒に楽しんでくださる大人たち。とてもあたたかい雰囲気の中で、このような演劇公演のあり方もいいなあ、と思いました。今後、第2弾、第3弾と、開催していけたらと思っております。

最後に、桑名市文化協会関係の皆さまはじめ、公演の開催にご協力いただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



桑名の石取祭の更なる発信に向けて

社会文化部門 大河内 浩

(個人会員)



昨秋の桑名市民芸術文化祭では社会文化部門として、小川雅生氏が「石取祭車装飾の歴史」という演題

で講演をされました。一般大衆向けとは言い難いテーマのため、四十名ほどと聴講者数は少なかったのですが、石取祭保存会役員の方々や、遠くは愛知県からも自町内に石取祭車をもつ方たちが来ていただきました。

平成十九年に国指定重要無形民俗文化財の指定を受けた、桑名石取祭の祭車行事は、同様に山車祭を保有する市町の保存会で構成される「全国山・鉦・屋台保存連合会」の会員となっており、今年は五月三十日に桑名で総会が行われます。また翌三十一日は、二十年に一度の伊勢一の鳥居御造替の御木

曳き祭が行われ、両日に互って多数の石取祭車の供賑が予定されているので、全国から集まる人たちに桑名の石取祭を知っていただく好機となります。

桑名の石取祭を含む全国三十二件の山車祭が一括してユネスコ世界遺産に申請されることが昨年発表され、平成二十八年予定の審査が通れば、石取祭は世界の石取祭となります。昨秋の氏の講演は、本年総会の中での「屋台等製作修理技術者会」の研修会講演への前哨戦でしたが、桑名の石取祭が全国へ、世界へと発信されるために、桑名市文化協会に加盟の皆様方からも応援していただければと思います。



数ある石取祭車の中でも祭車芸術の頂点に立つ桑名市有形民俗文化財の西船馬町「蔵前」祭車

新春六華苑祭に参加して

芸能Ⅲ部門 伊藤 好子
(伊藤好子&ダンシングステップ)

今年も天候に恵まれ、二日間にわたって盛大に開催されました。普段は静寂な中にも荘厳なたたずまいを見せている六華苑は、いつもと違い活気に溢れていました。歴史ある文化遺産である場所での開催は、とても意義深い事だと感じました。

今年度芸能Ⅲ部門は、モダンバレエ、ジャズダンスの二団体、二十名が、芝生広場で初舞をさせて頂きました。お正月にふさわしい



振り付け、楽曲、庭の木々に映える色柄、防寒にも考慮しながらの衣装作りにも力が入りました。着物姿の来苑者、出演者の皆さんと同様、華やかな衣装で、可愛く元気に踊ることができました。

これからも、皆さんが私共の踊りを見に芝生広場にも立ち寄って、楽しんで頂けるようにお稽古に励みます。

桑名市の文化を代表するこの素晴らしい企画が、新春を知らせる風のような祭典になることを願っています。

最後になりましたが、二日間お世話頂いた六華苑の職員の方々、関係者の皆さんにお礼申し上げます。

新春六華苑祭茶会

羊年に入ってから週末毎の寒波を一掃して、一月十八日(日)は好天に恵まれ、着物姿の方々も多くみられ、殊の外華やいだ新春六華苑祭となりました。

年八回、第三日曜日に六華苑の離れ屋で開催される月釜行事を、一月は新春六華苑祭に組み入れていただき、他部門のたくさんの方々に初春のお茶を味わってもらう事が出来ました。

お正月の華やいだ道具組みと真白な干支の薯蕷まんじゅうと抹茶の一品は、新年らしく一般の人々にも喜んでいただいたものと思います。



桑名には立派な歴史遺産もあり、美味しいお菓子、お茶もあります。桑名万古、桑名盆などコラボして、豊臣秀吉が催した北野

茶華香道部門 小川 章子
(表千家流)

大茶会を模して、気楽に飲める大茶会を催した面白いのではないかと、この会に参加して思いました。例えば寺町のお祭りなどに、他地域のお年寄り、若者、子供達のグループ、お店屋さんなど誰もが参加出来るよう募集して、おもてなしの精神で、オリンピックにさきがけて市民の日として集まれば、桑名をアピール出来るのではないのでしょうか。



新春懇親会

副会長 森 一蔵

新春懇親会が一月十七日(土)の午後六時より、桑名シティホテルで例年通り開催されました。

六華苑内のROCCAで行われたのは随分前のように思われます。お酒も出ますので、交通の便



の良い所は多くの参加が期待出来ます。会場のホテルでは、今年から調理人が替わり、和食の得意な人が入られたそうで、味覚に変化が出て来たように思われましたが如何だったでしょう。量的には完食になることが望ましく、今年は満足して頂けたのではないかと、密かに思っております。

今年は都合で参加が遅れたとはいえ、伊藤徳宇市長も列席して頂きました事は、懇親会が重みを増したと大変喜んでおります。

紫会 西川流舞踊の皆様のアトラクションが、正月の催しに相応しく、会場に華を添えて頂きました。ご婦人方の和服は特になかなかのものだと、悦に入ったのは私一人ではないでしょう。

各々の部門を越えての交流は、協会の素晴らしさを知る上で掛け替えのないものと思われれます。

これからも懇親会を続けることにより、人的交流が個々の創作の発想に大いに影響を与え、協会全体の渦となつて、文化の桑名を牽引することでしょう。



平成二十七年月度釜・華道展日程表

華道展 土曜日・午後一時～五時 日曜日・午前十時～午後四時
月 釜 日曜日・午前十時～午後三時半
ところ 六華苑〔月釜〕離れ屋 〔華道展〕番蔵棟
前売呈茶券 八百円（入苑料込） 当日券 六百元（入苑料別）

四月十八日（土）は県民の日を記念して、入苑料が無料となります。

開催日	茶道担当流派	華道担当流派
平成二十七年 四月十八日（土） 十九日（日）	（十八日のみ） 裏千家	石田流
五月十六日（土） 五月十七日（日）	（十七日のみ） 表千家流	華道家元池坊
六月二十日（土） 六月二十一日（日）	（二十一日のみ） 遠州流	MOA山月光輪花
九月十九日（土） 九月二十日（日）	（二十日のみ） 裏千家	小原流
十月十八日（日）	表千家流	休会
平成二十八年 一月十七日（日）	煎茶松風流	休会
二月二十日（土） 二月二十一日（日）	（二十一日のみ） 遠州流	竹真流
三月十九日（土） 三月二十日（日）	（二十日のみ） 煎茶松風流	草月流

桑名市文化協会育成補助金 募集のお知らせ

桑名市文化協会では、桑名市の芸術文化振興のため、文化協会会員が企画して行う事業に対して補助金を交付します。つきましては平成27年度の育成補助金募集案内をいたします。

◎応募受付期間

平成27年3月2日（月）～
4月3日（金）

（平成27年4月1日～平成28年3月31日までの実施事業に限る）

◎申請の制限

平成25年度・26年度に補助金助成を受けた団体・会員は交付申請できない。

◎お問い合わせ

桑名市文化協会事務局
（桑名市教育委員会 文化課内）
TEL 0594-24-1361

◎補助金の額

事業企画実施に要する交付対象経費の80%以内の額で30万円を限度とする。

◎応募の方法

文化協会事務局（教育委員会文化課内）で申請書類を受け取り、同事務局へ申請する。（文化協会のホームページからもダウンロードできます）



文協文芸

現代詩

現代詩やまぶき

母

安田 治三

今頃母は何をしているだろう

御無沙汰の父に抱かれて

水入らずの話をしているだろうか

八月母は逝った

あつと言う間の五ヶ月が過ぎた

冬將軍がナイフのように頬を刺し

心を凍らせる

人の心など容赦もしない

凍てついた砂利道は足音もしない

火葬された母の白骨は

僕に現実を押し付ける

それでも

時々頭の奥に母の音がする

柔らかな空気に包まれる

二人で何話をそう

心のアルバムを開き

子供のころの想い出話

紙芝居の絵を手伝って
描いてくれたこと

好物の茄子の漬物を

よく漬けてくれたこと

中学生の僕に車の運転を

教えてくれたこと

それとも今の僕を

叱咤するのだろうか

冬將軍が去り

明るい陽射しの縁側に

ほほ笑む母の姿が僕には見える

いつでも会える二人の時間とき



ご破算で

願いましては…

堀川 孝子

置いた珠を払い直して身構えた

自転車での帰宅途中

降り出した雨が

そろばん袋を伝って落ちた

X線治療で胸を焦がした父は

お粥すら喉を通らなくなり

母が将来のことを口にする

心配するな なるようになるから

と 最後まで気丈だった

間違った答えを出すたび

ご破算で願いましては

先生の厳しい声が飛んだ

私の原点は

あの夏休みのそろばん教室

パチパチはじく仲間たちのなかで

私のそろばんは軋んだまま

流れのままに生きていれば

父が指し示してくれた

なるようになったのだろうか

損得の計算ばかりして悔いてきた

「一日一日が旅だから」と

衣を脱ぎ替えた人は

八十年の生涯を

どんなにたっぷり生きてきたか

と 詩う

行き合った人たちと比べては

引き算ばかりしてきた私

ご破算で願いましては…

置いてきた一つひとつの珠に

父母の気配に気づいた今

もう そろばんはいらない

待つ

岡本 妙子

足元の小さな段差に気づけなくて
こけて頭を打った

傷の大きさにふるえて

がまんの時を過ごした

そっとそっと

祈るように指先をそろえた

盛り上がった土の中から

いつ名のりを上げるのか露の臺

ずっと待つしかなかった

春の知らせを

やがて土をはじき空に

向かって笑みを放ちはじめた姿は

痛みに耐えた冬の終りに似て

早春の夜明けのような味を

又もう一度味わって

明日の土を踏みしめることにした

現代詩と一緒に

創作しませんか

仲間に入って

楽しくやりましょう

現代詩やまぶき

働かず喜怒哀楽を食べている
農薬で旬の野菜を仕立て上げ

清水健吾

親と子の夢打ち砕く不合格
銘柄は問わぬお神酒の有難さ

梶 泰栄

いまひとつ自信なさそな四季桜
ニイハオも共に働く二度の職

真田五市

幸せを祈り病臥の鏡見る
上向いて渡る世間がすばらしい

森 繁生

借金を切り出す前に庭をほめ
おおいお茶一人でテレビ見ている

伊藤正則

定年になって惜しまれないを知り
金と暇余生になつてくい違い

木原広志

“文句取”について

木原広志

小学生へ英語を習わせること
について、あるコラムが触れて
いた。

いわく、英語の前に日本の古典
を習わせるべきであるとの意見で
あった。

若い人が海外の人と接する場
合、若い人は日本の伝統に無知で
あるとの指摘。英語も大切だが伝
統文化についても語れるように
なつてほしいと。

提案者は経験から述べて、外国
人、特にヨーロッパの人は、日本
人を見るといろいろ質問をする
と言ふ。フランス人に「能と狂言」
の違いを問われ絶句した商社マン
もいたそう。私も若い頃、能楽
をすすめられたが門外漢のままで
ある。

後年、友人のすすめにより「能
楽の友」を購読しているが全く進
歩はない。歌人、馬場あき子さん

の能楽のずいそうを読んで浅学を
恥じたが、後日馬場さん自身が喜
多流のシテ方と知り唖った。

一方、私の周りには、自称歌舞
伎が少なくない。川柳の大先輩の
句に、

やわらかい骨ばかり斬る箆釣瓶
があるが、顔見世などを得意気に
話すご婦人へ提示しても見事に
かわされる。

結局は歌舞伎でなく、役者を見
に行くことがわかった。

前述の「箆釣瓶」の場合も芝
居ではなく、佐野次郎左衛門を
演ずる中村吉右衛門を見に行く
わけである。どうあれ、歌舞伎
に興味のあることに変わりはない
ことだから喜ぶことである。

東京の出版社から「江戸川柳
文句取辞典」が出たと知り早速
取り寄せて八十の手習いへ手を
染めた。著者が私より三つも若
いのがシヨックであった。

文句取とは、江戸川柳・三十六
万句の中から、能楽、歌舞伎、文
楽などから詠んだ古川柳を言う。
従つて能や歌舞伎を理解していな

いと容量を得ない。昔の柳人はあ
るていど語れたが、現在は歳だけ
取つていても語れる人は少ない。
川柳の分野でも伝統文化は音を立
てて崩れ、昔日の姿はない。

「今の柳人は句会で句が抜ける
ことしか考えていない」とは、斯
界の第一人者、尾藤三柳氏の言。
句会で売れる句は一般には売
れないと言われる。江戸時代の
ように一般の人へ売れる句を作
りたい。



短歌

金雀枝短歌社

●会員 近詠

大川をわたる電車の窓はるかほんのりけふの空明けそむる

岩花キミ代

音もなく車の走るバイパスを遠く望めり母住むホームに

岡本 節子

秋空をゆつたり回る観覧車パステルカラーの彩きはやかに

高橋 典子

なしくずしに秋の隣に引つ越せば七分袖から長袖はすぐ

斎田 眞希

母亡くせし嫁が老父に手を添うる袂のしつけ残れるままに

後藤 明美

長き髪をハープ奏でる仕種して三つ編み作る車中の若き娘

上田 順子

低き声を絞り出すかに歌い出す麦屋節に心引かれる

三林 牧子

夏野菜の収穫おわり畑広し隅に冬瓜三つ四つ居座る

水谷 郁子

荒るままの徳成諸戸の草を抜くきれいになりゆく喜び感じ

西羽加代子

たんぽぽの綿花を散らしゆふぐれの畦道をきて茄子に水やる

近藤 光子

まつり笛きこゆる畦みち鎮守へと九つの少女にかへりて急ぐ

上原巳喜子

つつしみて写経一枚謝しまつる怪我もなほりて風の涼しき

三田香代子

露草の咲く畦道を犬とゆく深まる藍の秋風に揺る

伊藤美咲子

レシビ添えさつまいもの蔓いただきぬまず丁寧に皮をむきゆく

伊藤 紗代

コンバインの後に従きいる鴉らの嘴前に左右に忙し

海老原秀世

開け放つ朝の窓より木犀の仄かな香り部屋に入りくる

石川 房子

黄の小菊数多の蕾開き初む仏華にしよう草取り終えて

石川富士子

秋日和メモ持ち出掛けし買物に帰りて見れば忘れものあり

大石 朝子

口下手で多くは語らぬ父なりき指に残りいし最期の傷

大平 千歳

すっきりとのびる水仙そのもとに緑つややか彼岸花の芽

久保 正子

「エンプティ」中身飲み干し日本茶のペットボトルを示して通る

佐竹貴代子

わが町の天神さまの秋まつり誰が打つのか太鼓のひびく

小林三江子

マンボウの尻鰭ぶつりと切れぬたりサメに食はれた証かもしれぬ

加藤よしみ

皆既蝕深まる月の暗赤色空の暗さに不気味さ覚ゆ

窪田 靖子

望の月徐々に欠けゆく時の間をちろろは闇に肅しゆくと鳴く

黒田美代子

熊野路の山はつらなり逆光にかすむ山肌浮き立ちてをり

前田 誠子

楽しめないわしのショーのトルネードパンフレットに時間確かむ

西塚 郁代

白樺の白くつづける風景の裾に広がる草もみじ萌ゆ

伊藤さくえ

新幹線 東京オリンピック YS 11 回顧の報道に思ふあの頃

高橋フクミ

仰ぎ見る銀杏の黄葉はまだ早し東本願寺の御影門くぐる

松岡 綾子

笹尾城の古井戸探検せし山のくづされ家々建ちならびたり

服部ふさ子

行き付けの床屋病の癒えたるか白髪を染めて我を迎へぬ

田中 流石

台風去り空との青さ際だてり鈴鹿の山々ジーンズの青

土井寿美子

新さんまの貼り紙につと足を止むトト屋の辺り秋色深く

内藤みち子

この年の見おさめとなる月下美人玄関に入れほころぶを待つ

南部 信子

窓ガラス叩き荒ぶる台風に出産間近の孫思ひをり

水野千枝子

生きにくき今の世を生くこの夏の事件災害数多続きて

中村 里子

母逝きし十月十五日けふ一回忌うす曇る空に雁がねのゆく

水谷貴美子

昭和期の幾多の障害乗り越えて平成の世の平和を祈る

月井 和恵

いとけなきレタスの苗を植ゑいそぐ午後より雨の予報信じて

千種てい子



一楓・山城顕彰短歌

■小・中学生作品

リコーダーふいてる気持ちであら
わせば雨ふる後のにじのようだな

小六 大島 千沙

お父さん仕事帰りの服のにおいが
んばってきたしうこだね

小六 渡辺 香奈

とまらない汗をふきふき高くだく
暑き夏の日おとうとの世話

小六 栗田 菜穂

清水でたくさんお土産買ったけど
持ち帰れない音羽の滝の音

小六 金森 舞音

かかとふみくつが痛い泣いてい
るかわいそうだなしっかりはこう

小六 白井 玖流

うちにいる不思議な家族は両生類
ウーパールーパー飼い主似です

小六 水谷 希未

がんばったプールそうじのかい
あつてやつと泳げる今日の水泳

小六 藤田 珠希

図書館はつかれた体のいやし場所
ほっとひといきついて本読む

小六 田中 明花

PKでみんなのおもいをうけとめ
てラストの一本ぜったい止める

小六 園田 大騎

雨もやみやがて聞こえるセミの
たかまる心はあの雲のよう

小六 薄井 秀真

練習後きれいに磨いたスパイクが
夕日を受けて赤く輝く

中二 加藤 動

読む本は花びらのようにふんわり
と小さなゆめをおくってくれる

中二 丹羽 菜々代

弟のアイスクリームついた口おも
わず拭いた私の右手

中二 榎本 玲那

ガンバレの声が飛び交う炎天下
限界突破走る走る

中二 伊藤 壮汰

閉ざされたドアの向こうに新しい
何かが僕をまってくれてる

中二 伊藤 康平

決めておけいつ聞かれてもいいよ
うに一番ほしいひみつ道具を

中二 池田 香奈子

ダムダムとドリブルの音なりひび
く明日の試合へ一人練習

中二 水谷 元哉

あなりたい先輩の音を目指しつ
つききほれてしまうサックスの音

中二 伊藤 寧音

母に問う私のことは大事かと無言
で抱いてくれる母の手

中二 近藤 汐音

夏の夜トタン屋根に降る雨音が拍
手に聞こえて気持ち高ぶる

中二 加藤 幹也

え に し だ

金雀枝

主幹・発行人 大平 修身

三田 香代子	近藤 光子	河合 賢子	加藤 よしみ	尾崎 昭雄	上原 昌子	岩花 千代	稲吉 裕子	安生 直美
森下 弘子	水谷 洋子	平山 三郎	林本 政夫	橋川 孝雄	西羽 加代子	中森 和子	富田 博一	高橋 フクミ

会費 年間10,000円
金雀枝短歌社
〒511-0031 三重県桑名市三の丸116
加藤よしみ方 電話0594-21-5869

桑名空襲の夜

個人会員 松井 久雄

★一発の照明弾は昼のごとうつし
出したりわれらの街を

★おとなりの人の背中の中燃ゆる火
を見すごし逃げし空襲の夜

★焼夷弾十数万発生き地獄慰霊碑
のことはあらためて読む

★どぶ川に浸かりてひたすら念仏
をあたり炎につつまれし夜

★手とり合い浸かりていたる溝川
に火柱ま近に迫りて来たり

★何も持たず来てしまったと言ひ
残し家にもどろし必死の父は

★仏様の絵図今もあるあの夜に運
び出したる父ありてこそ

★足くびの曲がりし人の呻き声焼
け野が原に朝は来たれど

★焼けおちし家々の跡見まわりに
父につれだち我も行きしか

★わが街の空襲の夜若きはばあ
さん残して逃げしというか

★焼け跡の囲いし中に大火火鉢
ずっとそのまま置かれていたり

〈機帆船〉

★透きとおる若葉の緑わが庭の柿
は洪柿庭の住人

★一年中紅きもみじ葉されど今と
くにきれいだ春の色かな

★水彩画教室仲間つれだちて描か
んとする赤須賀漁港

★岸壁にならびていたる機帆船今
も頭ちくる杳き日のこと

★コメブネと呼ばれていたる機帆
船熊野と桑名結びていたり

★日の丸の小旗に送られ召された
るああ輸送船父の名の船



桑名地名あれこれ(1)

川口町と七里の渡し

社会文化部門
(個人会員)

大河内 浩

本年はいよいよ七里渡口の伊勢一の鳥居が建て替えられます。二十一年に一度の遷宮を受けて、伊勢神宮から、ここと赤須賀神明社、城南神社の三カ所へ崇高な鳥居の払い下げがあり、桑名は全国でも例のない、お伊勢さんとゆかりの地です。

川口町は、七里渡口を上がった人びとがお伊勢さんへ向かうのに最初に通る東海道沿いの町で、江戸時代天明年間(一七八一〜八九)に伊勢路への入り口として、また神宮遥拝所として大鳥居が建設されました。番所・船役所や、明治時代になると郵便局も建てられて賑わいました。七里渡口は昭和三十三年(一九五八)に三重県文化財史跡に指定されています。

伊勢一の鳥居は神社ではありませんが、それに準ずるものとして認識され、昔はその傍らに川口町と東船馬町預かりの小祠がありました。明治十九年(一八八六)の船津屋からの出火による火災で、市内西方の個人宅邸内へ移遷され、現在では桑名宗社境内の母山神社へ合祀されています。

川口町の石取祭車は、明治時代前半に建造されたもので、力強い彫りの彫刻と、青海波紋の蒔絵や七里渡図(桑名城と神宮鳥居)の天幕、八咫鏡文様の水引幕など、町内にちなむデザインで纏められ祭車上部に天照大神像を飾ります。石取祭とは別に、伊勢一の鳥居の祭礼時には別の装飾備品もあり明治大正期の世相をよく伝えていきます。前回平成七年(一九九五)の鳥居建て替え御木曳き行事のときも、川口町は独自に石取祭車を曳き出して奉祝の意を表しました。



写真は、向唐破風の屋形を立て神籬の真榊に八咫鏡と八咫瓊勾玉そして天叢雲剣の、三種の神器を飾り、伊勢一の鳥居の祭礼を行う川口町の石取祭車です。

平成二十六年度

新入会員の紹介

(敬称略)

(3月1日現在までに入会の会員)

○光映会

代表 廣山 三千代(美術・染色)

○コカリナサークル 森の精

代表 佐藤 純子(音楽・コカリナ)

○Happy Clover

代表 中川 淳子(芸能I・大正琴)

○押し花俱樂部 花アート

代表 近藤 嘉代子(美術・押し花絵)

○葛巻 ゆかり

個人(音楽・マリンバ・打楽器)

○消費文化研究会

代表 城田 吉孝(社会文化・消費文化、老舗企業の研究)

編集後記

今年度も市民芸術文化祭、新春六華苑祭ともに盛大に実施されました。広報担当委員として参加させて頂き二年目で経験浅き中色々と勉強させて頂きました。

最近海外でも日本人が色々な分野での活躍の報に接しますが、ここ桑名市文化協会に於ても、各部門の方々のご活躍振りに改めて感激しております。

第23回総会のご案内

日時 平成27年5月10日(日)

午前10時から

(受付は午前9時30分から)

会場 桑名市大山田コミュニティプラザ 中会議室

*各部門から代議員の選出をしていただきます。

広報担当副会長
委員

文学部門 丹羽 宗俊
美術部門 上田 順子
音楽部門 末廣 英昭

芸能I部門 山口 典久
芸能II部門 村瀬 昌子

芸能III部門 藤田 周岳
演劇部門 伊藤 好子

社会文化部門 早川 幸成
茶華香道部門 大河内 浩

趣味教養部門 三浦 幸子
加藤 誠

今後会員が増える事を期待して又、文化意識の向上を目指し、更なる会員様のご活躍を発信していきたいと願い、第三十七号をお届けいたします。

(上田 順子)

